

『サイラス・マーナー』再考：家庭の天使と新しい女

富田 成子*

A Study on *Silas Marner* : Angel in the House and New Women

Shigeeko TOMITA*

—
『サイラス・マーナー』（以下、『サイラス』と略記）は、エリオットの生涯で最もくつろいだ安らかな境地で制作された作品^①と言われる。「古い昔の面影が残り」、「馬車の角笛も世論も聞こえてこない中央平野」という静かな田園に繰り広げられるストーリーは、語り手の成熟した口調といい、選挙や政争といった社会的な波乱の少ない穏やかなプロットといい、独特の落ち着いた静謐の雰囲気包まれている。実際、前作の『フロス河の水車場』や『引き上げられたヴェール』の、起伏に富んだプロットの展開、語り手をはじめ登場人物たちの激しい感情表白、作品に漲る不穏な情念とは著しい対照を見せている。

『サイラス』は小品だがまとまった奥深い作品として、高く評価されてきた。ダブル・プロットより成るストーリーは構造的にも完璧と言ってよいほど綿密に考慮されている。前半、平行して夫々独自に進展するサイラス・プロットとゴッドフリー・プロットは、赤屋敷での舞踏会の場面で初めて、サイラス、エビー、ゴッドフリー、ナンシーの主要人物が一同に会し、エビーの養育をめぐるサイラスとゴッドフリーの道徳的選択をターニング・ポイント（岐路）と

して、それ以降は応報のプロセスが繰り広げられていく。二つのプロットは交互に登場し、時間の経過につれて見事に対照的な結末に至るネメシスの模様を織り上げていく。

こうして、金貨とエビーをめぐる因果の展開は、図式的と言ってもよいほど単純に具現される。道徳的寓意があまりにも明白で、絵に描いたような成就へと向かうその整然とした構成とサイラス・プロットに於ける愛の思想の称揚は、リアリズム風に読むと不自然であり、白々しい読後感を禁じ得ない。更に、サイラスは、「平凡な人物」を主人公とする意義を強調してきたエリオットの人物造型の中でもとりわけ地味で生気が乏しく魅力に欠ける。

このように『サイラス』は、一筋縄ではいかぬ複雑なプロット、精細な心理描写による多面的な人物造形といったエリオット通例の魅力が希薄な点は否めない。しかし、結婚の悲劇という後期作品で繰り返し追究される主題に本格的に取り組み、炉辺（家庭）の幸せの枠内に安住せず、真の絆を求めて自己の信念を貫くエビーやプリシラのような新しいタイプの女性像が登場した点では興味深い作品である。本論では、『サイラス』に取り上げられた様々の結婚と家族のあり方に焦点を当て、「家庭の天使」への懐疑と、それに代る新たな価値観の台頭について考察したい。

* 本学特任教授

二

ヴィクトリア朝時代、大英帝国のめざましく繁栄する経済・産業を支えたのは、主として実業を経営する中産階級の男性たちであった。そして、その激しい仕事に邁進する男性たちを陰で支えたのは家庭を守る女性たちであり、彼女たちの内助の功は国富に資する強力な底力と考えられ、家庭を賛美する風潮が強かった。女性が本領を発揮すべき場は「炉辺」にあり^②、「炉辺」すなわち家庭の幸せを主題とする小説が多く書かれている。『サイラス』にも「炉辺」の言及は非常に多い。しかし、家長として君臨する男性が外の勤め（仕事）を果たし、女性は「家庭の天使」として無私の愛を捧げるという、ヴィクトリア期の社会通念が理想とする家庭像は、『サイラス』では影が薄い。むしろ既婚女性にとって著しく不平等だった当時の結婚制度と実態に潜む影が、あちこちで仄見え、聖なる結びつきとされた結婚への懐疑の念が窺われる。更に、サイラスとエピーのような血縁や結婚の絆ではなく心情で結ばれた家族の新しいあり方が主筋として脚光を当てられたり、プリシラのように強い意志のもと独身を貫く例など、家父長社会・階級社会に磐石に定着していた伝統的な結婚制度の枠を超えた新しい家族のあり方、新しい結婚の選択が取り上げられる。以下、ナンシー、プリシラ、エピーに見られる家庭像と結婚観に注目し、後期小説で繰り返し取り上げられる結婚の主題がここで萌芽として見られることを検討したい。

ゴッドフリーはラヴィロウの階級社会の頂点に立つスクワイア、カス家の長男であり、ナンシーも所領を持つラメター家の娘である。共に地主階級に属する二人は、村人たちからも似合いのカップルとして結婚を待ち望まれている。早くに母親を亡くして淋しい家庭に育った

ゴッドフリーは、清潔で秩序ある家風のもとで育ったナンシーとの結婚を「楽園」のように憧れている。ゴッドフリーがナンシーに求めたのは、「炉辺に笑い声の起こる家庭」であり、つまり時代が理想とする家庭像である。当時流行の手引書、サラ・ルイスの『女性の使命』がモットーとして教えたのは、家庭における女性の道徳的影響力の大きさであり、心地よい家庭を築くこと^③であった。しかし、「居間や台所の、健全な愛や威厳の源泉となる妻であり母たる存在が欠けた」（三章）カス家には、勤勉・誠実といったヴィクトリア人が志向する道徳律が崩壊している。父親のスクワイアは居酒屋に入り浸り、息子たちも働くことをせず無為の生活に流れている。家族間には挨拶も礼儀も無く、心の交流も無い。嘘言や賭け事が日常茶飯で、兄の弱みに付け込み恐喝したり、遂には盗みに至るダンスターの墮落振りと言うまでもない。ゴッドフリー自らもモリーとの秘密結婚、更に彼女の死を傍観しエピーを見捨てるというやましい過去がある。

ヴィクトリア朝の社会通念は、結婚を聖なる場と称揚し、厳しい性的モラルを強要したが、その一方で未婚・既婚、階級の如何を問わず風紀の乱れがひどかった。激増する娼婦の存在を必要悪と認めるなど、性規範における男女の落差（ダブル・スタンダード）は大きく、公認の一夫一婦制を逸脱する男性が多かったと言われる^④。特に結婚に関しては、一八世紀以降、聖職者立会いの上、教会で挙式するという正式の結婚制度が乱れ、秘密結婚、重婚、未成年の結婚などが激増している。野放し状態になっていた性の紊乱に歯止めを打つべく一七五三年ハードウィック法が成立する^⑤が、その後も依然として秘密結婚をはじめ、男性の放縦は続いている。特に中流階級の裕福な男による貧しい労働

者階級の女の誘惑——見捨て——転落の増加は社会問題化し、一八五〇年代の小説と絵画のテーマとなる程であった^⑥。

ラスキンが家庭を「あらゆる恐怖、疑い、不和を締め出す避難場所」^⑦として神聖視したように、家庭は俗悪とは無縁の聖域の筈だった。このような聖なる場に入る資格の無い致命的な罪をかかえているゴッドフリーだが、ダンスターの逃亡、モリーの死によって秘密を葬り去ったと思ひ込んだ彼は、心置きなくナンシーとの婚約を進める。

…the vision of his future life seemed to him as a promised land for which he had no cause to fight. He saw himself with all his happiness centered on his own hearth, while Nancy would smile on him as he played with the children.

将来の生活像は、まるで、そのために戦う必要のない約束された国のように思われた。この世のありとあらゆる幸福が自分の「炉辺」に集まり、子供と戯れる自分に向かってナンシーが微笑みかけるのを思い描いた。(一五章)

こうして、第一部は「炉辺」の幸せを確信し、明るい未来を思い描くゴッドフリーの夢で幕を閉じる。

罪と恥を嫌う潔癖なピューリタン精神のもとで育ったナンシーは、カス家に嫁ぐと、一家に蔓延る放縦を是正し、家具を磨きたて、見違えるように清潔な心地よい家庭を造り上げている。夫ゴッドフリーも無為の生活から足を洗い、今や赤屋敷の当主として酪農を始めるなど事業を拡大し、農場経営に勤しむようになった。更にナンシーは亡きスクワイア（義父）の遺品を

記念の場所に丁寧に保管し、親に孝養を尽くすという娘の義務も申し分ない。こうして「家庭の天使」の役割を見事に果たしたナンシーは幸せになれただろうか。

「サイラスが炉辺に彼の新しい宝物を見つけから、一六年の歳月が経った秋のよく晴れた日曜のことである」という文章で幕を開けた第二部は、礼拝を終え教会から出てくる主要人物の描写から始まる。ラヴィロウのような小村にも、階級制度は厳然と定着しており、一章での赤屋敷の宴会の座席の位置、舞踏を始める順番といった年中行事にまで階級序列は深く浸透している。この場合も礼拝を済ませると高位の会衆から順に教会から退出することになっており、先ずゴッドフリーとナンシー、続いて貧しい会衆たちの中にいるサイラスのグループがクローズ・アップされる。

第一部と第二部の間に設置された一六年という空白期間によって、第二部の冒頭、読者が先ずひきつけられるのは、時が刻んだ人物たちの鮮やかな変化である。一六年の歳月は、容貌や体格といった外観のみならず、人物たちの生活や運命にも変化をもたらしたことが、礼拝を終えた群像の描写から視覚的に伝わってくる。少し太って貫禄がついた以外さほど変化の無いゴッドフリーに比べて、ナンシーの変貌は著しい。依然として美しいものの、花の輝きは失せ、「引き締めた穏やかな口元、澄んだ褐色の誠実そうな眼差しは、幾たびも試練を経て、しかもあくまでその高い資質を失わなかった彼女の人柄を物語っている」(一六章)とあるように、苦しい試練に遭遇したことが窺われる。

ナンシーの結婚生活には「痛ましい経験という一本の糸がその真ん中を貫いて」(一七章)いる。彼女の深刻な悩みは、「家に子供がいないということが夫の心に慰めるすべもない淋し

さとなって宿っている」ことにあった。当時、女性は、男性の妻・母・娘としての存在意義を重視されるものの、一人の人間としての存在感は極めて希薄だった。妻・主婦・娘としての勤めを立派に果たしているナンシーは、模範的な妻・主婦として夫からも敬愛され近隣の評価も高い。しかし、第一子の死産後子供に恵まれない彼女にとって、カス家の後継者を産めなかったという精神的負担・苦悩は大きい。直系子孫が家を相続することによって維持される家父長制に於いて跡継ぎたる子供の欠落は致命的であり、母としての役割を果たせなかったナンシーは、埋めようのない空虚な思いを抱いている。

秘密結婚のこと、エピーについての真相を告白されたナンシーは、激しい怒りや嘆きを見せず、「蒼ざめ、物思いに耽る塑像のように静かに、手を膝の上に固く握り締めて」いる。「何事も前もって思い描くほどよいものではない——私たちの結婚だってそうでしたわ」（一八章）。そう言ってかすかに浮かべた悲しげな笑みには、期待とはほど遠い結婚の現実への諦念と自嘲の色が濃い。

三

ナンシーの姉、プリシラは結婚の実態を見据えた上で「家庭の天使」たることを潔く放棄し、独自の生き方を貫いている。女性の定番コースである結婚を乾いた口調でバッサリと切り捨てるプリシラの発言は印象深い。ヴィクトリア朝の時代精神の一環として、男は逞しく強く、女はか弱く優しく美しく、という男女の性別のステレオタイプ化が挙げられる。しかし、この理念は主として中産階級に根づいたものであり、上流階級はある程度この束縛から免れていた。例えば狩猟のような男性的娯楽なども男女平等であったり、か弱さを徳目とする風潮も希薄で

あった⁸。小規模ながらも父親が地主であるプリシラは、中産階級が信条としたこの理念を頭から一蹴している。舞踏会に姉妹は同じ衣装を着るべきとのナンシーの主張に合わせて、似合わぬ衣装に身を包み「私はナンシーを引き立てるカカシ役」と朗らかに言っただけ。美醜が女の評価基準となる世間的な価値観を笑い飛ばし、美しくあることを要求され男に選んでもらうのを待つような結婚など歯牙にもかけていない。思わせぶりの態度を取りつつ、一向に求婚しないゴッドフリーの煮え切らない態度に苛立つ妹ナンシーを見て、プリシラは辛辣に言う。

“…I've no opinion o' the men, … And as for fretting and stewing about what they'll think of you from morning till night, and making your life uneasy about what they're doing when they're out o' your sight —it's a folly no woman need be guilty of, if she's got a good father and a good home ; let her leave it to them as have got no fortin, and can't help themselves… I know it isn't pleasant, when you've been used to living in a big way, and managing hogsheads and all that, to go and put your nose in by somebody else's fireside, or to sit down by yourself to a scrag or a knuckle ; ”

「私は男性をえらいと思わないわ・・・男性が自分のことをどう思っているだろうと、朝から晩まで一喜一憂したり、自分がいないところでは何をしているのかしらと心配するなんて馬鹿馬鹿しい。立派な父親と素晴らしい家があれば、気に病む必要などないの。そんなことは、財産も力も無い人に任せておきなさい。大きな所帯を張

り大樽などの扱いに慣れていたら、他人の炉辺に鼻を突っ込んだり、やせこけたまらず肉を食べたりするのはつまらないと思うわ」(一章)

当時、男性は精神的、肉体的、更には道徳的にも女性より優れていることが、「自然の法則」として公認されていた。無力な存在である女性は男性に依存し庇護される代わりに、服従・謙虚・無私の献身を要求され、制約や不公平に甘んじねばならなかった。特に既婚女性は「夫の庇護下にある婦人」という法律上の呼称からも明らかのように、実質的な地位が無かった⁹⁾。当時よく読まれた手引書『イギリスの妻たち』に於いて、エリス夫人は「妻は何があっても夫を尊敬せねばならない」¹⁰⁾と教えている。しかし、プリシラは「私は男性をえらいと思わない」と公言し、男性優位の時代の規範に愛想を尽かしている。自活するのが非常に難しく男性に依存せねば生きていけなかった中流階級の女性と違い、地主の父を補佐して所領を逞しく切り盛りするプリシラには、「他人の炉辺に鼻を突っ込む」といったささやかな幸せなど眼中に無い。「『好き勝手にしろ』氏 (Mr Have-your-own-way) が最高の夫よ。そんな男性なら大人しく従いますよ」(一章)という彼女にとって何より大切なのは物心両面における自由である。

この台詞の背後には、当時の既婚女性が法律上、如何に無力で惨めな存在だったかという実情がある。「夫婦は一体であり、夫がその主体である」という大儀名分の下で、妻は夫の法的存在の中に融合され、法的権利を喪失する。動産・不動産を問わず妻の財産権は全て、婚約の段階で夫のものとなった。また結婚後の相続権や金銭収入も、やはり夫のものとなった¹¹⁾。財産権、所得権以外にも、自由の権利(夫が妻を

監禁する権利は一八九一年まで存続)、子供の保護権利等が夫に属しており、既婚女性の法的地位は非常に惨めであった。財産権の喪失に関しては、階級の上下を問わず実施されるので、プリシラとて結婚すれば、経済力に関しては無力になる。引用の彼女の台詞には不合理な結婚制度への義憤の念が汲み取れる。

多くの女性を苦しめたこの悪法の改正を求めて、エリオットの親友バーバラ・ボデションたちによる尽力の結果、妻が自分の収入のうち二百ポンドまで使用できる権利を認める財産法が一八七〇年に、完全管理権を認める財産法が一八八二年に成立する。しかし、『サイラス』が書かれた六〇年代当時、既婚女性は「家庭の天使」といううたい文句で祀り上げられるものの、実際は幽閉同然に家庭に閉じ込められ、庇護を受ける代わりに全財産を夫に捧げ、多くの権利を奪われる結婚制度が横行していたのである。

一八九〇年代のイギリス小説には、伝統的な女性の役割を拒否し、自己が求める生き方と結婚を実行する新しいタイプのヒロインが登場する。いわば「家庭の天使」とは対極の女性が登場し、独身主義を貫いたり、従来の結婚制度の枠を超えた自由な男女の結びつきを実行したのだった¹²⁾。引用したプリシラの文言は赤屋敷での宴会の際の発言であり、一八一五年頃と推定されることを考えると、プリシラの生き方は九〇年代の新しい女たちに先駆ける極めて進んだ存在であったと言えるだろう。

これに対し、エビーの場合はどうだろうか。大晦日の夜、雪の中で凍死する母のもとから、サイラスの小屋の光を目指して「炉辺」(hearth)へと辿り着いたエビーは、サイラスの古い外套に包まれて眠り込む。

Perfect love has a breath of poetry which can exalt the relations of the least-instructed human being ; and this breath of poetry had surrounded Eppie from the time when she had followed the bright gleam that beckoned her to Silas's hearth ;

完全な愛情は、教養の低い人々間の関係を高揚させる一種の詩の境地をもっている。そしてこの詩の境地は、明るい光がエピーを彼の炉辺に招きよせた時以来、彼女の身の回りを取り巻いているのだった。

(一六章)

暖かい炉辺でサイラスの外套に包まれて眠るエピーの姿は、これから始まる愛に包まれた家族のあり方を象徴している。酒場女のモリーとの秘密結婚の末、生まれたゴッドフリーの隠し子エピーと、傷心をかかえて北部から流れてきた他国者のサイラスは、どちらもラヴィロウ社会に属する場の無い異分子的存在である。実の父に見捨てられた幼子と、親友と婚約者から裏切られたサイラスとの、虐げられた弱者同士の再生、血の繋がりの無い親子を結ぶ完璧な愛情は、上記の引用にある「詩の境地」として非現実的なほど美しく昇華される。

あどけないエピーのあえかな美しさは、村人だけでなく、犬や猫、鳥や虫といった小動物をも惹きつけ、更に咲き乱れる花々が取り囲む。サイラスのエピー養育は植樹のイメージに喩えられ、愛する大切な苗木が立派に育つように、他者に教えや助言を乞い、あらゆる知識を吸収しようとしている。また、村人たちもサイラスを一種特別の存在と考えており、支援を惜しまない。こうして、「エピーが来て、再び彼と外界を結び付けてくれた。そういうものを一つに

渾然とする愛が、エピーとサイラスにはあった。そして子供と外の世界——男や女から、虫や石に至るまで——の間にも同じような愛があった」(一四章)と、大自然から村人に至るまでコミュニティーの万物に広く愛された二人の世界はユートピアのような理想の境地として称揚される。無教養な織工として階級社会の底辺に喘ぐサイラスの無私の愛はこのように美化されるが、その対極に、放縦と身勝手な我欲に揺れ動くゴッドフリーたち上流階級のモラリティーの腐敗が見据えられているのは言うまでもない。

第一部に於いて、無垢の美しさで万物を結びつける寓話世界・聖書世界の「天使」として語られるエピーは、生身の人間らしさが希薄であり、漠とした造形に終始している。しかし、第二部では、養女、結婚といった運命を左右する重大な選択に当たって、明確な自己の意志を断行する芯の強い乙女として描かれていることに注目したい。

先述したように、第二部の幕開けは、一六年後の人物たちの変化を鮮やかに印象付けた。ゴッドフリーとナンシーに続いて、語り手の視線は貧しい会衆へ移り、サイラスたちのグループへと読者を誘う。すっかり年老いたサイラスに寄り添うのは、咲き始めた花のような一八才の乙女に成長したエピーと今や若者となった幼なじみのエアロンである。歩きながら三人は一類り庭造りの計画を話し合っている。「家に庭が欲しい」というエピーの願いを聞いたサイラスとエアロンは快く賛成し、土堀りや植える植物などについて楽しく話し合っている。

ところで、ヴィクトリア朝小説のコンヴェンションでは、「庭造り」はそれに従事する人たちの愛の絆、即ち、家庭作りを示唆すると言われており¹³、この場合もエピーとエアロンの結

婚と、愛で結ばれた三人の豊かな人間関係が暗示されている。そして庭造りが三人の協力によって行われるように、結婚はエビーとエアロンだけの結びつきではなく、エビーが再三念を押すとおり、「エビーがサイラスのもとを離れるのではなく、エアロンという息子が増える」と言うプラス志向のものである。こうして第二部の冒頭では、ナンシーの顔に刻まれた深い苦悩とは対照的に、明るい未来を予感させ幸せな雰囲気を出すサイラスたち三人の仲のよい様子によって、物語後半の幕開けから既に二組のグループの運命の明暗が如実に示されている。

エビーの実の父であることを告白し、彼女を養女として引き取りたいとのゴッドフリーの申し出を、エビーは丁寧な礼儀を尽くした上できっぱり断る。

“I wasn't brought up to be a lady, and I can't turn my mind to it. I like the working-folks, and their victuals, and their ways. And,' she ended passionately, while the tears fell, 'I'm promised to marry a working-man, as 'll live with father, and help me to take care of him.' ”

「私はレディなんかになるように育てられたわけではありません、またなりたくもありません。働く人たちが好きです、そういう人たちの食べ物や暮らしが、好きなのです。それに」感極まって言葉を切ると、涙が落ちた。「労働者と結婚する約束をしました。その人は、お父さんと一緒に暮らして、私と力を合わせてお父さんの面倒をみてくれるのです」(一九章)

階級と権力への上昇志向はヴィクトリア人に見られる顕著な特長だが、リスペクタビリティ

を渴望する時代精神とは逆に、エビーは裕福なジェントリーのレディーになる玉の輿を拒絶し、連帯感 (fellowship) で結ばれたサイラスとの絆を躊躇なく選んでいる。カス家の正当な相続者はエビー以外にいないため、彼女の拒絶によってカス家は絶滅することとなる。ラヴィロウ階級社会の頂点に立つゴッドフリーを拒否したことは、単に彼個人の否定だけではなく、家父長制度の否定でもあり、コミュニティーの秩序に反旗を翻す行為でもあろう。

更に彼女は労働者との結婚を力強く宣言している。エビーが結婚相手として選んだ庭師エアロンは、カス家やオズグッド家などラヴィローでも上流階級に出入りしているが、決して卑屈にならず、「土地が出来るだけよく利用され、誰もがほんの一口でも食物を口にできるようになったら、食べ物に困るものはいなくなると思う」(一六章)と、地主による土地の独占に懐疑を抱き、貧しい同胞のために土地の有効活用を望む労働者である。モラル・フェイブル (道徳寓意) のコンテクストの中で進む『サイラス』では詳細に追求されないが、エアロンのさりげないこの台詞の背後には、困り込みによって、地主たちが更に所有地を増やす一方で、労働者や小規模小作農たちは、かつて自由に利用し生計を得ていた共有地を取り上げられ、暮らし向きが格段に貧しくなった当時の農村労働者の飢餓の実態がある。

エビーの家庭は、サイラスとエアロンに加えて、衣食の世話から躰まで体験に基づく親身な援助で当初からサイラス親子を支え続けたドリーを事実上の母として、他人の集合による合成家族であるが、誰一人として自我を貫く者はおらず、他者への愛と思いやりに溢れている。結婚式を終え、沿道の村びと達の祝福を受けつつ花嫁行列が家に向かう物語の最後を、「私たち

のお家は、何てきれいでしょう。私たちほど幸せな人は他にいないわね」というエピソードが締め括り、連帯感で結ばれたサイラスたちの愛が高く称揚される。

四

『サイラス』執筆前後のエリオットの生活で特筆すべき変化は、ルイスの息子チャールズとの同居が始まったことだろう。『フロス河』完成の三日後、例によって書評の煩わしさを避けてイタリアへ逃れたエリオット達は、ローマ、ナポリ、フィレンツェ、ベニスに六月末まで滞在する。帰途スイスに立ち寄ったエリオットは、初めてホウフヴィールの寄宿学校に学ぶルイスの息子たちと会う。卒業後の進路を模索する長男チャールズを連れて帰国後は、就職を目指し受験勉強する彼の支援に追われる毎日だった。八月半ば、郵便局の就職が決まると、通勤に便利ようとロンドン市中へ引越すなど、生活は更にチャールズ中心に明け暮れている。その多忙の中から『サイラス』は、九月三〇日着手されたのだった。

当初心配していた義理の息子との同居は、エリオットにとって思いのほか楽しかったようだ。「息子のチャーリーのことでは心は一杯。毎日してあげたいことが山のようにあります——身体を四つに切り分けねばならないほどよ」（『書簡集』三卷三二四）。七月一四日付けのチャールズ・ブレイ宛の手紙をはじめ、『書簡集』からは、気立ての良いチャールズに恵まれた幸せを喜び、かいがいしく彼の世話をするエリオットの心の弾みが印象的である。「人生も晩年になって、彼女と息子たちの間の完璧な愛を見ることは、最高の幸せです。長年、家庭生活に縁が無かった私ですが、今は滅多にないほどの家庭の幸せに恵まれています」（『書簡集』三、

四二一）とのブラックウッドに宛てたルイスの手紙からも分かるように、エリオットと息子たちとの仲は極めて良かったようである。チャールズとの同居を契機に、ルイスの母をはじめ以前とは異なる人たちとの付き合いも始まり、人脈の輪は大きく広がっている。音楽という共通の趣味にも恵まれ、創作の不調な折には彼のバイオリンに合わせてメアリアンがピアノを奏でたり、一緒にコンサートに出かけるなど、生活は格段に活性化している。老いた父に尽くしたコヴェントリー時代以降、ひたすら文筆に打ち込む生活を続けてきたエリオットに思いがけず訪れた新たな人間関係の絆。そこから開けていく豊かな人脈と活気に満ちた生活。他者に尽くす幸せと新鮮な喜びが『書簡集』第三巻を通じて伝わってくる。

チャールズはルイス亡き後付き添うことを許された唯一の存在としてエリオットを支え、一八八〇年五月六日（ジョン・クロスとの結婚当日）付けの遺書では、唯一の遺言執行人に指定されるなどエリオットの信頼は深かった。後年、さる婦人から「ルイスはメアリアン・エヴァンスを愛したため、妻のもとを去ったのか」と聞かれたチャールズは、邪推だときっぱり否定した上で、「ジョージ・エリオットは崩壊した家庭を素晴らしい生活へと変えてくれた。母親の無い哀れな我々兄弟に対して彼女がどれほど尽力してくれたか、誰にも分からないでしょう」^⑧と言っている。

「幼子こそ、老いゆく人にとりて / この世の与えうるいずれの賜物にもまさり / 希望と期待する思いをもたらすものなれ」。ワーズワスの『マイケル』から引用したこのエピソードを作品の冒頭に掲げ、更に一四章の末尾では、『旧約聖書』創世記一九章の、破滅のソドムから市民たちを救う天使のエピソードを引き、この現

世で天使に代わって「静かな明るい境地」へと導いてくれるのは、幼子ではないだろうかと訴える。物語の冒頭や掉尾といった目立つ重要な位置にエピソードや引用を配置して、希望と救いを与えてくれる子供の力を強調している点に注目したい。

執筆時期から考慮すると、『サイラス』はエリオットが四一歳にして義理の息子を育て、親子として初めて緊密な絆を結ぶことになった新鮮な体験の真ただ中から生まれている。「チャールズはかわいい大切な息子です。純粋で美しいあの子の心を守るためなら、どんな犠牲も惜しくはありません」(『書簡集』三、四四九)を一例に、チャールズの性格の美点は書簡で繰り返されている。成長過程にある若者が撒き散らす多彩な喜怒哀楽。親子の絆を通して増殖していく人間関係の交流の広がり。この間の心境や実体験がサイラスとエビーの愛に何らかの形で投影していることは否定できないだろう。

結婚を聖なる結びつき、家庭を聖なる場とした当時の単純な考えに、エリオットはかなり懐疑的だったのではないだろうか。結婚という最も基本的で最も密接な男女関係には、自我の闘争が不可欠であることを、彼女は決して無視できなかった。「結婚はかつて多くの物語の到達点だったが、アダムとイヴの場合同様、今なお大きな出発点である」(『ミドルマーチ』)と言うエリオットには、従来の作品のように、めでたし、めでたしと結婚で物語を締めくくる楽観性はない。男女の生々しい喜怒哀楽はむしろ結婚後にこそ始まるのであり、その前途多難は人類生誕の原初からの普遍的事実であることを見逃せないのである。ジェイン・オースティンの作品を始め、当時大半の小説が夫探しのプロセスを主筋とし、結婚というハッピー・エンディングで終わるのが常だったが、エリオットは

結婚後に焦点を絞り、結婚の試練を経て開眼していくヒロインのビルドアップに光を当てている。『サイラス』ではナンシーの結婚やプリシラの言動に、「家庭の天使」の不幸な現状が垣間見られたが、後期小説では、時代やフェミニズムの域を超えた、結婚に必然的に潜在する夫婦の自我の葛藤という永遠の問題が繰り返し追究されることになる。

(註)

- 1) Rosemary Ashton, George Eliot, A Life , (Penguin Books, 1996) p.253.
- 2) 松村昌家、『ヴィクトリア朝の文学と絵画』(世界思想社、1993) p.65.
- 3) 川本静子、「清く正しく優しく——手引書の中の〈家庭の天使〉像——」松村・川本・長島・村岡編、『女王陛下の時代(英国文化の世紀3)』(研究社、1996) pp.57-58.
- 4) 荻野美穂、「堕ちた女たち——虚像と実像」、『民衆の文化誌』(英国文化の世紀4)』(研究社、1996) pp.169-71. 度会好一、『ヴィクトリア朝の性と結婚——性をめぐる26の神話』(中公新書、1997) p.9.
- 5) 青山吉信、『忍従より自由へ』(評論社、1976) p.171.
- 6) 松村昌家、『ヴィクトリア朝の文学と絵画』(世界思想社、1993) p.87.
- 7) 川本静子、「清く正しく優しく」p.61.
- 8) Julia Prewitt Brown, *A Reader's Guide to the Nineteenth-Century English Novel*, (New York : Macmillan, 1985) pp.71-72.
- 9) 栗栖美知子・出淵敬子監訳、『イギリス女性運動史 1792-1928』(みすず書房、2008) p.415.
- 10) 川本静子、「清く正しく美しく」p.64.
- 11) メリン・ウイリアムズ著、鮎沢・原・大平

訳、『女性たちのイギリス小説』（南雲堂、2005） p.20.

12) 川本静子、「新しい女の新しさ」、川本静子・北條文緒編、『ヒロインの時代』（国書刊行会、1989） p.9.

13) 大嶋浩、「*Silas Marner*論：Southy的ユートピアとGeorge Eliotの二重意識」

『ジョージ・エリオット研究』創刊号（日本ジョージ・エリオット協会、1999） p.25.

14) Katherine Adams, *Those of Us Who Loved Her — The Men In George Eliot's Life*, (The George Eliot Fellowship, 1980) p.154.